

仰げば尊し我が師の恩・・・

卒業式で唄うことで殆どの人知っている歌だった文部省唱歌「仰げば尊し・・・」。近頃の卒業式では色々な歌が使われるようになり、この歌を唄わないで卒業する人もいるらしい。

小学校は6年間と長いので卒業の時に感激があるが、中学校や高校では3年間なのであつという間の卒業で感激の度合いが低かったという人もいるし、中学や高校の時の方が心に残る体験が多いので感激度が高かったという人もいる。小学校の卒業式で手を取り合って涙を流していた子達(女子が多かったが)、一か月後に同じ学区の中学校でまた会うのになんで泣くのかな、と不思議にも思った。

と他人のことをとやかく言う前に我が身を振り返ってみると・・・。

小学校の卒業式では、周りを見ると涙を流している男の子もいたようだが、自分としては悲しみや、感激による涙など出てこなかった。それは、六年生の一学期の途中で転校したため在学期間が僅か10ヶ月だったことにもよるかもしれない。卒業式を終えて、担任の先生に励ましの言葉を戴いて校門を後にしたのだが、さほどの強い印象や感傷はなかったような気がする。(先生には申訳ないが)

小学校に入学したのは「静岡県吉原市立伝法(でんぼう)小学校(現在は富士市立)」、五年生の二学期から「宮城県伊具郡丸森町立大張(おおはり)小学校」に転校、六年生の一学期の途中で「東京都千代田区立番町小学校」に転校と三つの小学校に通った。

三つの小学校で過ごした6年間の「我が師の恩」を振り返って見る。

昭和26年4月、一年赤組の担任は川島きぬ先生。サザエさんのような髪型で、いつもフォーマルなスーツを着ていて、ぎょろっとした目玉で、きりっとした態度は一年生にとっては威厳を強く感じる先生だった。優しい先生ではあったが、厳しさもある先生で、先生と言うよりもお母さんのようだった。

東京から西へ150Kmほど離れた地方都市ではまだ幼稚園に行く人などいなかったの、一年生の担任の仕事は大変だったと思う。まだ「戦後」という言葉が抜け切れていない時代で、一年生の履物は靴・下駄・ぞうりと様々だったし、ランドセルではなく兄弟のお下がりの肩掛けカバンの子もいた。鼻水をたらしている子は勿論、学校で「おもらし」をする子だった。農家の子もいたし、サラリーマンの子もいたし、自営業の子も会社経営者の子もいて、各家庭の貧富の差はかなりあったように覚えている。

二年生になると組の呼び名は数字になって、二年三組になった。担任は興石英雄先生で、めがねをかけた温厚柔和な先生で自宅は同じ町の中の天理教の教会だった。何人かの友達と一緒に家の前まで行き、教会の門柱の脇から恐る恐る中を覗いて「ここが先生の家だよ」とひそひそやっていたら、突然玄関が開いて先生が顔を出し、「入って来なさい」と。そしてお茶だかお菓子だかをごちそうになった記憶がある。

おそらくご両親がこの宗教の信者だったのだろうが、宗教に関する話など一度も聞いたことはなかった。興石という姓は山梨県に多いので、親またはその先祖が富士山の反対側の山梨県から移ってきたのかもしれない。いつもポマードできちんと整えた髪型で眼鏡越しの眼差しが穏やかな先生で、叱られたことはあまりなかった。

三年一組の菅谷昇先生は若くて澁刺とした先生で、毅然としたカッコいい先生だった。二つ年上の姉達の年代の女の子達から人気があったようだ。今になって様々なことを思い出しながら年令を逆算して見ると、まだ20代前半だったと思うので新任の教師だったのかもしれない。独身で、隣の鷹岡にある実家から通っていたようだった。遠足の帰りに実家へ案内してもらったこともあるし、先生のお母さんが亡くなった時に三年一組の代表で、女の子と二人でお葬式に参列した(させられた?)こともあった。この時代には先生による「生徒の家庭の訪問」は勿論のこと、生徒が「先生の家へ遊びに行く」こともあり、先生と生徒の間の距離は短く繋がりは深かった。

四年一組の担任は河野先生(名前を忘れてしまったが、ひらがなの名前だったと記憶している)。やや大柄で

はあるが、戦争で焼夷弾の被害を受けたとのことで、やや前かがみ気味の体型だった。初めての授業で自らの身の上話をされたことを覚えている。そんなこともあってか、弱者に寄り添う優しさを感じさせる先生だったが、怖い先生だった。四年生になって多少増長し始めた我々が不手際をしでかすと、かなり厳しい叱りを受けた。高校生ぐらいの娘さんがいて、日曜日に先生の家へ行ったりすると接待してくれる微笑みの美しい優しいお姉さんだった。四年生が間もなく終わる頃に、お別れ会をしましょうということになって、皆で駿河湾の浜辺まで遠足をしたことがあったが、こういう時には娘さんが同行して我々と行動を共にしてくれた。三年生の頃から、「段々怖い先生になってきたな」と肌で感じ始めてきた。

五年三組の池野とし子先生はあまり笑わない「見るからに恐そうな先生」だった。語り口は優しいが、めりはりが聞いた物腰で話は解りやすかったが、起こると怖い先生だった。町はずれに家があって何度か遊びにも行ったことがあった。五年生になると度重なるクラス編成替えを経て友達がかかなり増え、深いつながりを持つ友達もでき始めていた。この先生が私にとってこの学校での最後の先生になるとは思ってもせずに新学期を過ごしていた。そして一学期末で転校することになったが、不慣れな東北地方の山村の学校へ転校した私に何度も手紙を下さり、文中にはかなりの励ましの言葉が含まれていた。

ここまでの来る間に、私にはもう一人「尊き我が師」がいた。一年生の時に出会った今村甲子夫校長先生。富士山麓一帯の教育委員会では作文教育に力を入れていたこともあり、一年生の頃から夏休みや冬休みには必ず日記を書くと言う宿題が出たし、何か出来事がある度に頻繁に作文という課題が出た。

一年生の時に夏休みに絵日記を書いて二学期始めにこれを提出したら、校長先生に呼ばれた。「夏休みが終わってからも毎日書き続けなさい」と言われ、時々担任の先生に提出するように指示された。

現在手元に残っている絵日記帳から想像すると、昭和26年11月頃から始まったと思われる。所々に担任の先生や校長先生の朱書きのコメントが入っている。三年生の時だったのだろうか、校長先生は人事異動で教育委員会へ転出され、日記帳の担任教師への提出も徐々になくなっていった。しかし、ことあるごとに日記と言う形で記しを残す習慣はその後も残り、途絶の時期も多々ありはするが今でも細々と続いている。

この地に育ち、この先生に出会うことがなければ、この習慣はできなかつただろうと思う。

その後大人になってから知ったことだが、校長先生の家は富士市内で幼稚園をやっていたようだった。小学校の教師を退いた後で幼稚園を始めたのだろうと思うが、「一生涯を幼児教育に捧げられた」という表現がぴったりするような先生だった。

さて、五年生の夏休みが終ると大変な出来事が待っていた。母の実家がある宮城県伊具郡丸森町の大張小学校への転校で、環境は一変した。学校まで徒歩1時間、冬には雪も積もる田舎。

(この村での体験については、拙書駄文「山村の思い出(大張の一年)」をご覧ください)

一学年に一組ずつしかないこの学校で出会った担任の先生は高橋志郎先生。初対面の印象は「若くて、体がかっちりした厳つい先生」だった。東北本線の白石駅からバスで一時間余の山中の学校の教師は村に住んでいたが、実家はやや仙台寄りの船岡か槻木という所だった。まとまった休みがある時には家に帰っていたが、普段は村の住人だった。

富士山麓の温暖な土地とは違って寒く厳しい山村の子ども達はひと回りもふた回りも逞しく、言葉の違いもさることながら付いて行くのは大変だった。(今風に言えばカルチャーショックか?)

生徒が不手際を起こせばゲンコツやビンタは容赦なく来たし、バケツを持って廊下に立たされたこともあったし、ストーブの薪で殴られたこともあった。とは言っても強もての教師ではなく、昼休みなどには一緒に遊ぶこともあり生徒との距離は近い感じがした。授業の一環として山の柴刈り・炭焼き・田圃のイナゴ取りもあり、そんな行事の時には先生も生徒も一体になって働いた。狭い村に住んでいれば血のつながり以外に人情のつながりもある、そんな感じがした。

この学校で六年生になって間もなく転校が決まった。東京へ出るのには東北本線で9時間かかるので夜行列車を使うことになった。家族そろって白石駅で上野行を待っていると、そこへ高橋先生が現れた。実家に帰る途中で見送りに来てくれ、激励の言葉と握手。先生の大きな手で握られた6年生の右手はしばらくしびれ

ていた。若くていかめしい熱血漢のような先生の温かい手が印象的だったが、50年後に開かれた同級会の席で同級生から聞かされた事実には驚いた。当時高橋先生は代用教員だったらしい。

転校してきた東京の都心の学校では六年三組、60人を越える人数のクラスが三つもあったので驚いた。竹内千重子先生は女性ではあるが威厳がある先生だった。言語も異なり生活習慣も異なる所へ入ってきた転校性にとっては大変な体験だった。クラスの半分は地元の子どもだったが、残りの半分は親の意向で他区や他県など遠方から越境通学して来る子どもだった。大都会の学校なので先生も遠くから通ってくるから、これまでのような先生と生徒・生徒同士の往来にも限りがあり、私からすれば担任の先生との距離感は今まで感じたことがないほどだった。5月に転校してきて3月に卒業、小学校6年間の思い出を辿っていくと、この学校での出来事はあまり思い浮かばないのは止むを得ないことだろう。

ところが、この先生が定年退職後しばらくして高齢になった頃に千葉市の我が家からさほど遠くない所に転居してきた。何度か門前をお訪ねすることはあったが、妹さんと同居とおっしゃっていたような気がする。その後市内の老人ホームのような所に入り、当初は訪問したこともありはしたが、やがて人との交流も拒むようになり音信が途絶えた。

そんな関係で6年3組のクラス会があると、私が「先生の近況をひとこと・・・」とクラスメートに紹介した時期があった。10か月しか在校せず、心のつながりを実感する所まで行くことができなかった転校性の私が、こんな役割を果たすという不思議な結末となった。

以上

<付録>

 仰げば尊し <文部省唱歌>

仰げば尊し 我が師の恩 教への庭にも はや幾年 思えばいと疾し この年月 今こそ別れめ いざさらば	あおげばとうし わがしのおん おしえのにわにも はやいくとせ おもえばいととし このとしつき いまこそわれめ いざさらば
---	---

互いに睦し 日頃の恩 別る後にも やよ忘るな 身を立て名を上げ やよ励めよ 今こそ別れめ いざさらば	たがいにむつみし ひごろのおん わかるのちにも やよわするな みをたてなをあげ やよはげめよ いまこそわかれめ いざさらば
---	--

朝夕馴れにし 学びの窓 蛍の灯火 積む白雪 忘る間ぞなき 行く年月 今こそ別れめ いざさらば	あさゆうなれにし まなびのまど ほたるのともしび つむしらゆき わするるまぞなき ゆくとしつき いまこそわかれめ いざさらば
---	---

「仰げば尊し」の楽譜には「文部省唱歌」と書いてあるだけで、作詞者も作曲者も書いてないのでそれ以上のことは知らないで過ごしてきた。小学校の頃には耳で聴き仮名文字を追うように唄っただけで意味は殆ど理解していなかった。中学校の頃になると部分的に漢字で追うようになり薄らと意味を思い浮かべはしたが、解らない部分は勝手に想像するだけでごまかしてきた。古文を読める知識が多少身につけてきた高校生の頃になるとようやく意味が解りかけて来た。そして、大人になってこの歌を唄わなくなってから、あらためて歌詞を読み返してみて、本当の意味が解ってきた。

2011年にアメリカで原曲の楽譜が発見されたと言う。発見したのは一橋大学名誉教授の櫻井雅人という先生。1871年に出版された音楽教材に楽譜が掲載されていたとのこと。

原題は「Song for the close of school」。